

爲したり親近者は此別離に皆流涕し悲嘆に暮れたるが斯くてあるべきにあらねば、金口は神の旨に其旨なくば一本の髪の毛も首より落ちず己を委ねて主教館の小かなる戸を開きて表に出で人目を避けて海岸に赴き兵士の手にて小舟に乗せられウイフニヤに追放されたり。

▲「約翰教徒」の窘逐

金口の追放を聞きたる敵は一齊に手を擧げて喜びたるも其喜びは其後幾何もなく君府を襲ひし椿事の爲に打消されたり。即ち約翰の去りたる後間もなく如何なる原因にや不明なるも君府の教會堂に火災起り火は風に煽られて四邊に廣がり元老院及び其他市街の有名なる建築物を悉く焼き君府を一大火海と化せしめたり。されば或者は之を以て義人を苦めたる神罰の降れる者と爲し約翰の敵は之を約翰の從者の

放火と疑ひ金口に從順なりし多數の市民を嫌疑者として捕へ之を拷問に處し爲に悶絶せる者さへ生じたるが火災の原因に就ては遂に知る事能はず、一方君府の大主教には約翰の退位の後ネクレイの兄弟たる者アルサキイ就任し金口に從順なる教役者は皆「約翰教徒」と呼ばれて迫害せられ財産の沒收追放等有ゆる苦難を蒙りたり。

▲幽閉中の聖金口

不義は斯の如く勝利を占め不正なる窘逐者は勝ち誇り而して罪惡に満てる世の大光明は辱めを受け且つ追放せられたり。されど此勝利は外部のみの勝ちにして眞の勝利者は常に義なり。正義は如何に追放せられ如何に迫害せらるゝとも又如何に荆の冠を被らせ耻づべき十字架に釘するとも其聲は迫害と刑罰を以てしては黙せしむること能は

ざるなり正義は常に不正の上に勝利を占む義の爲に窘逐せらるる者は福なり天國は彼等の有なればなりと實に天國を有てる者は即ち勝利者なり蓋し天國は人の靈魂の赴く所にして其最高の目的は其なればなり天國を有たざる者は不遇者中の不遇者にして其生活は暗澹たり設し正義に打勝ちたる如く見ゆるも事實は敗北者に均し斯の如き事は大聖人約翰と其迫害者の運命に見るも明なり。

▲皇后再び約翰の首級を索む

皇后エウドクシヤ君府より聖金口を放逐し其希望を達したりと雖も尙心中安からず如何にもして速に約翰の存在を絶たんと圖れり金口は幽閉中も皇后の爲に苦められたり蓋し皇后の心は殆ど嘗て約翰が「イロアデデ」は狂氣し喉を隔り拍手し約翰の首級を再び索むと述べた

る様に異ならず皇后は實に此言を想起す毎に狂氣の如く怒り約翰の首級を索めたり即ち皇后は兵士に命じ約翰の流竄地に赴く時金口は出来得る丈残酷に取扱はしめ彼を辱しめ早く死ぬべき様に爲せと命じたり斯の如きは實に婦人獨特の殘忍性にして彼の命を受けし兵士は又喜んで辱しめを金口に與へ以て金口の生命を短からしめたり即ち或日には金口を裸馬に乗せ優に二三日の旅程ある間を馬に鞭ちて疾驅せしめ晝間些少の休息をも與へざるに夜間は又不潔なる旅舎又は時として猶太教を奉ずる者の宿又は淫婦の宿に泊らしめ以て約翰に努めて不快の念を與んとせり且つ彼等は聖金口をして何處の教會にも立寄るを許さず偶々金口が斯る希望を述べれば有ゆる侮辱と嘲笑を浴せ彼の持てる扶持を取つて金口を饑餓に瀕せしめたり以上は義人金口が其流竄地に赴く途に於て擔ひたる十字架なり彼の受けし

辱しめは音に愚昧なる兵士より蒙りたるに止まらず歴山市のセオヒ
川の友人の住居せる一市街を通過せる時の如きは其地の教役者より
も亦様々なる迫害を蒙り或る市にては金口の市街通過を許さず他の
市に於ては同行の兵士を煽動して最殘忍なる取扱をなさしめ金口の
仇敵なるカツパドキヤの主教ハルテリの如きは將に金口を殺さんと
造したり彼ハルテリは金口を故に歓迎し特別なる家に入れ夜間修道
士等をして其家を襲はしめんと企みたり然るに幸にも金口は環め其
事あるを知りて夜間市を遁れて山地に赴きたれば無事なるを得たる
が此避難の時其乗れる騾馬蹶きて金口は地上に落ち激烈なる打撲傷
を蒙りて一時は生命の危険なる程なりき若し約翰にして神の撫理を
信せず其限りなき希望を神に寄せず彼が屢々口にせる如く凡てを神
の爲と思はざりしならば恐らく失望し自暴したるなるべしされと彼

は斯る場合に在つても常に神を頼み居たるを以て極端なる悲みに陥
ることなかりき彼が流竄地に赴く途中に於て纔に慰を得たるはタウ
ロキリキヤ市に於て未見なる主教及び修道士より深厚なる同情を受
けたる時なり實に同市に於ては多くの修道女等は嘗て耳にし又苦行
者の一大教訓書たる童貞論の著者たる金口が追放の途中市街を通過
するを見て非常に同情し涙を流して約翰の口沈黙すべくんば寧ろ太
陽の光消えたる方可なりと叫びたり金口は實に未見の者より斯の如
き同情を蒙りたるを以て衷心慙からず慰藉され感極つて彼も亦流涕
したり。

▲君府に於ける神の義罰

約翰の流竄地はタウル山脈の一谿谷なる小アルメニヤの一寒村ク、

ツなり。同地は山賊の巢窟にして彼等は附近の村落を襲ひ掠奪と殺人とを業とせり。先の君府の府主教は斯る暗澹たる墓場の内に生活を營まざるを得ざるなり。若し神の激怒にして不義者を罰せざらんには彼約翰の敵は此く事件の落着せるを以て安心したるならんも義なる神は之を許さず。君府に於て行はれし暴行の噂の西羅馬に達するや、パバインノケンテイ一世は事の詳細を探知して之を皇帝ゴノリヤに奏上し、彼に依て其兄弟アルカヂイに代願を請ふと借に自らも亦嚴正なる手紙を皇帝アルカヂイに送りたり。彼は記して曰く、昔者義人アベルの血はカインの兄弟殺の罪を鳴らしたるが如く、我が兄弟約翰の血は汝の罪を神の前に鳴せり。汝之が報いを受くるや必せり。蓋し汝は平和の日に神の教會を迫害し、眞の教役者を追放し、基督を夫と共に追出し、教衆を一雇人に任せたりと。皇帝ゴノリイも亦兄弟アルカヂイに手紙を

認め彼の暴行を責め事の真相を調査する爲に使者を派遣せり。されどアルカヂイは事の既に挽回すべからざると皇后エウドクシヤの悪性を恐れ、薄志弱行の者に往々あるが如く、其心中に於て己が不正事を辨へつゝあるにも拘らず、兄弟の派遣したる使者に對して頗る虐待を爲したり。然りと雖も神の義怒は何時までも斯る悪事を許さず。降生四百年九月、君斯坦丁堡に畏るべき暴風起り、一瞬間に田畑の作物を悉く全滅し、此と同時に地震及び地鳴り起り、恰も地は不義を行ふ悪者を戴くを欲せざるが如く、晝夜鳴動し、尙同年十月六日には皇后エウドクシヤ崩御するあり。彼は義人の死を希ひたるに、今其志を果さずして却つて自ら神の法廷に召され、其臨終も殆ど悶絶せしが如き悲惨なる光景を呈したり。皇后に續いて他の惡謀者等も皆所罰せられ、ハルキドンの主教キリンは足に生せし肉刺の爲に難み、遂に双脚腐敗して死し、其他

約翰を苦しめし敵は或は馬より落ちて致命傷を負ひ或は水腫病の爲に死し或は舌癰の爲に難み又歴山市のセオヒルの如きは全身麻痺せる有様となれり皇帝アルカヂイは身體こそ健かなれ其精神は非常に困憊して彼は遂に苦行者に祈禱を頼み心中の苦悶を晴さんと欲し一日彼はシナイ山に於ける一苦行者ニルに祈禱を依頼したるにニルは却つて彼に向ひ古の預言者の如き嚴格なる言を以て返書を送つて曰く君府には有ゆる犯罪行はれ不正事は未だ曾て見ざる様を以て莫り又同府は教會の柱たり眞理の燈臺たり基督の柱たる聖約翰を放逐しなから其恐るべき報たる地震より同府を免れしめんとする汝の希望は頗る勝手なり云々と

▲謫地に於ける聖金口

斯く神の怒りは不義者を罰したるが之に反し金口約翰は全地は主の有にして主は之を滿せりて基督教の**見解を保てるが爲に**グ、**イツの寒村に居ながら其間に安心と喜を見出し彼は寧ろ罪の世を離れて曠野に住居する如き生活情態に其身の上の變りたるが爲に靈魂の疲れを息め得るを頗る喜びたり**金口はグ、**イツに於て土地の主教アデルヒー及び村の名家ヂオスコルの尊敬を蒙り殊に後者の如きは約翰に己が家政を委ね彼に必要なる凡ての物質を供給したり其外約翰の舊友も金口の事を忘れず屢々君斯旦丁堡及びアンチオヒヤの遠きより彼を訪問し來り殊にアンチオヒヤの教衆を其愛せし牧者の今の悲境に同情すること甚しく**約翰の流竄の噂一度アンチオヒヤに達するや彼の崇拜者等は隊を組みテグ、イツに向ひ爲にアルメニヤの僻村は參詣者の來る一聖地と化せり約翰の敵が嘲笑的にアンチオヒ****

ヤ全市はク、一ツに家越すと云ひたるも無理なきことなり。金口も亦其昔の友人及び教衆の事を忘れず彼に屢々奨励の手紙を送り殊に敬虔なる女輔祭オリンピアダの如きは聖金口より手紙を受けたる事最も多く金口が彼女に送れる手紙は今日まで保存せられて如何に金口が流竄地に在つても其教衆の靈魂上の幸福を慮り又教會の父たる彼が如何に其教衆に深き基督教的の愛を有せしかを示せり。金口は又東及び西羅馬の多くの主教とも文通を爲したるが此書面は又金口が己の悲境を忘れて如何に基督教會の進歩と幸福を希ひたるかを示せり。金口は又神の國を可成的多く獄舎と死の蔭に坐する者の爲に廣めんとする希望を流竄の内にもありても棄てず恰も彼の聖使徒保羅が枷に繋がれつゝも他人の救贖に關して苦心するを怠らざりし如く金口も亦流竄中に在つても其思は異教を驅逐する方法の案出に費しフイニキ

ヤに之がため一布教使を派遣せんとし又福音の宣傳地として最も好望なる波斯にも亦布教を企てたり。夫れ斯の如く聖金口は基督教徒の爲に盡し又使徒の如き熱心を以て未開の地に基督教の布教を企てたり。彼は殊に務て半未開なるゴツト族に福音の光を傳へて以て文化したる基督世界の蒙る危険を除かんと考へたり。斯の如くして嚮に何人も知らざりし一アルメニヤの寒村は福音傳道の源泉地となり其處より出づる福音の光りは遠く全世界に波及せんとする不可思議の光景を呈するに至れり。

▲約翰更に流竄地を變ぜらる

斯の如くにして主教座より追放せられたる主教の其流竄地に居りて恰もアンチオヒヤ及びコンスタンチノーホルに在る時の如く世界の燈

火となり寒村ク、一ツは君斯旦丁堡の威光を殺がんとしたれば約翰の反對者は非常の恐慌を起したり。されば一時神の義罰を恐れたる約翰の敵は其罰の去ると共に恐れを忘れて再び約翰に對し惡計を企み始めた。彼等は既に約翰は死せるものなりと考へたるにも拘らず金口は猶生き前日に優りて基督教世界の注目する所となり始めた。されば彼等敵は互に語りて曰く「死者は再び生者と勝利を獲し者との危険物となれり」と實に彼等敵は約翰が再び君府に歸り來ること無きやを氣遣ひ此事に就き最も心を悩したり。此事實たるや決して有り得べからざる事にあらず。蓋し彼金口の後繼者たるアルサキイは間もなく卒去したれば再び君府の主教座の後繼者に關する各種の議論起るべき模様ありされば約翰の敵は此事件を成るべく速に決すると共に彼等の爲に最も危険なる巢窟とも云はるべきク、一ツの村を破壊した

らんことを企み皇帝を動かして金口約翰をク、一ツより更に遠きピウントに流竄地を移すべき命を發せしめたり。ピウントはポント及びコルヒーダの間に介在し黒海に沿ふ東羅馬最遠の一市にして同地の住民は悉く未開民のみなり。流竄地移轉の嚴命は四百〇七年六月、不意に發せられ延期を禁せられたれば兵士は無慈悲に聖金口を捕へて住馴れしク、一ツの住民とも訣別を與へしめず金口を引立て亦も遠き旅路に就かしめたり。

▲聖金口の永眠

此時の金口は既に老年なる爲健康非常に衰へ馬上の困難なる旅行は彼を非常に悩したり。彼の精神は元の如く確にして神の攝理に對する希望は動かざりしを以て新なる流竄地に移ることに關しても彼は平

素懐ける全地は主の有にして主は彼に満つ凡ては神の爲なりとの見
 解に依り何等の恐れも悲みも不平も述べざりしと雖も彼の體軀は太
 陽の堪へ難き炎熱と礮確なる旅程には勝たれず其勢力は非常に衰へ
 て三箇月に亘れる旅行の後ポントなるコマン市に着せる時の如き金
 口は最早動き得ざる迄に衰弱したり。同地には聖ワシリスク(マクシミ
 ンの時代に致命せし主教の名に依る聖堂あり約翰の宿れる所は例に
 依り市外なるが故に會堂と相隔り居たるがコマン市に着したる夜金
 口は夢にワシリスク現れて「勇めよ我が兄弟約翰よ我等は明日相共に
 在るべし」と語れるを夢見たり。翌朝金口は目覺めて其體の全く力無き
 を感じ護送の兵士に向ひ數時刻なりとも出發を延期すべき襟願ひた
 るにも拘らず彼等は其願ひを聞入れずして出發したるに途に金口の
 唵々たる氣息を見て止むなく聖ワシリスク教會に引返せり其時約翰

は渾身の勇を出して教會堂内に入り祭服の借用を請ひ其を身に著け
 旅装を衆人に分ち聖體禮儀を行ひ自ら聖體を領けて數刻大聲を以て
 熱心に祈りたるが其祈の聲は其後次第に弱まり微かになりしを以て
 會堂に居れる者は驚き金口に近づき將に倒れんとする體を支へたる
 に金口は凡て皆神の爲なりと呟き十字架を畫きて彼は足を伸ばし「ア
 ミン」と云ひて遂に靈を神に渡せり。これ實に四百〇七年の九月十四日
 にして約翰の齡六十歳なり彼は天主教たる事六年半なりしが其内三
 年三ヶ月は流竄地にて月日を送りたるなり。

▲金口遺骸の遷移

金口永眠の報附近に傳はるや各地より教役者苦行者及び敬虔なる信
 徒夥しく集り來り敬虔の心を以て永眠せし主教の柩に近より一目な

りとも金口の姿を見彼の死骸に禮拜せんと欲したり彼の遺骸は嚴かに會堂内に聖ワシリスクの死骸と並べて葬られ彼の前夜見たる夢は實現せられ甞に天堂に於て偕にするのみならず地上の教會に於ても亦偕に居るを得たり而して約翰の訃報アンチオヒヤ及び君府に達せる時には市民は皆悲しみ或者は號泣し聖人を亡せし者を口を極めて罵り彼等は故金口の慈善事業と其生涯と其驚くべき雄辯とを皆偕に思ひ出し口を極めて讚美したり後年皇帝フエオドシイの時約翰の敵の怨み消滅したるを以て彼の遺骸は嚴にコマンより君斯坦丁堡に移され(四百三十八年)彼の遺骸は嘗て彼が生存の時に追放せられたる聖使徒の會堂内に改葬せられたり。

以上は聖金口に關する略傳に過ぎざるも我等は此傳を讀みて金口の非凡の教役者にして當時の教會に於ける偉大なる革新者たるを知る

と同時に彼の苦難多き生涯を見彼の執筆せる諸説教を讀みて其中に盡きざる教訓を得ること多きを認むるものなり。

聖金口の生涯と其事業(終)

附
録

金口の著作の基督敎文壇に於ける
地位と各國語に翻譯せられし経路

教會の聖師父の著書が心靈を啓發する爲に多大の價値あるに就きては、茲に多く述ぶるを要せず、實に彼等の著書は正敎の凡ての神學の湧出する涸れざる源泉にして、又最も純潔なる神學上の凡ての知識を含有する鑛山なり。されば後世の神學者の爲すべき業務は此豊富なる鑛山を發掘して其れより得たる寶もて現代の心靈界を裝飾し之を高尙なる者とならしむるに在り。元來聖師父文學の代表者なる者は神學及世俗の諸科學を兼ね修めたる學才と、其に對する燃ゆる如き心の反響



聖金口の故郷アチンヤヒヤ現景

を以て一世を擢んでし人にして、内容の多様にして豊富なる思想及び感情を發達せしむべき時代に生れて其事業を爲し遂げたる眞の天才なるが、其が中に在りて聖金口約翰の如きは特に注目すべき所の人物にして、彼の著書は實に宗教文學の黄金時代とも稱すべき時の著作の殆ど全部を成せるものなり。露西亞人の祖先が非常なる勤勉と趣向とを以て「ズラトストロイ」及び「イズマラグドイ」と稱する二書中に集められし聖金口の著作を寫して其を讀み、其内より言ひ難き趣味を汲み取りたるは決して偶然のことに非ず、彼金口は實に稀に見る天才にして彼の著作は心靈上の眞理と深遠なる教義とを追求する凡ての知識に満足と與ふるものなり。

聖師父の著書は露國に基督教の傳はると殆ど同時代に露國民の祖先によりて愛讀せられたる重なる書籍なるが、就中聖金口の著書は露國

民の心情に能く適合したる爲に彼等の間に最も愛せられ最も廣く行はれし者なり。彼の著書が然く露國の讀書社會を捕捉したるは、彼の内に豊富なる思想と明晰にして自然なる又最も解し易き教訓と聽衆の心に適合する非凡なる雄辯とが互に融合したる爲なり。

聖金口約翰は特に近親者に對する愛を説きたる傳教者にして、彼の言語と行爲を一貫したる此愛は、形式的の學問の爲に破壊せられざる健全なる心に多大の感化を與へたりき。

聖金口約翰の著書を初て「スラブ語」に譯したるは餘程古き時代に屬し「ズラトウストイ」と名づけたる大冊の書は編集されたり。

「ズラトウストイ」を詳かに知らんとする人はアルハンゲリスキー氏著古代露西亞文學の研究「五三頁以下を見よ」ズラトウストイ」に關しては別にマリ

ンニン氏の特に著はしたるものあり。
 今日迄十一世紀の「スウプラリ」の寫本と稱して傳はれる金口約翰の説
 教集も亦スラブ文學の初期に關する者にして、此説教集の内にはシメ
 オンの「ズラトウストイ」に在る物と異なる金口の説教二十篇の翻譯を
 蒐集せり。金口の講話は又千〇七十三年に成りたる「スウヤトスラウ」の
 合本内にも一篇存在せり。又露國の古文書中には十二世紀の著作に係
 る「聖人傳記」に十七篇と十二世紀の「トロイツコセルギエフ修道院」の篇
 纂になる合本中に十篇存在す。斯る物の内最も著しきは十二世紀に成
 れる寫本たる「ホルガリヤの王シメオンの銘あるズラトウストイ」にし
 て、此寫本が如何に一般に普及し居たることは、古き寫本中には寫字者
 が故意に又は知らずく己が寫本に種々なる感慨を書き込みたるも
 の、多くあるに由りて明なり。

聖金口の著作集にして現今迄傳はれるものは「ズラトウストイ」の外
 海「マルガリト」及び「聖福音」を誦讀するに關する金口の説教七十五篇を
 集めたる「教訓的福音」と稱するものあり、然れ共露國民の祖先が如何に
 聖師父の著書を受したりしかは、彼等が常に當時既に在りたる翻譯書
 のみと以て満足せず自ら進んで新たなるものを譯し別に一書を編み
 たる事を以て知り得べきなり。此新編書中特に有名なるは十二世紀上
 り十四世紀の間に種々の寫本を以て盛に普及されたる新ズラトウス
 トウキ及び「ズマラグドイ」の二書等なり。
 斯く聖約翰金口の著作は露國民の祖先により愛讀せられたりと雖も、
 彼等の間には未だ此師父の著作を多少系統的に編纂し若しくは其全
 著作を蒐集したるものなく、彼等によりて翻譯せられ出版せられ又は
 複製されたる者は悉く其斷片又は一部分に過ぎず、若し強ひて完全な

る物を求めなば十七世紀にキエフ修道院にて教會用スラブ語に譯され千八百九十四年聖務會院の活版所に於て刊行されし約翰金口の聖使徒パエルの書冊に關する講話書冊は金口の特に好んで解釋を試みたるものなりあるのみなり。

然るに一千八百二十一年聖彼得斯堡なる神科大學校より初めて最古の神學雜誌「基督教徒の讀物」の發刊せらるゝや該雜誌發刊の目的は重に教訓的の文を掲載するに在りたるが故に記事は凡て之を金口約翰の著作の内に求め其内より教訓に關する文を翻譯して此を紙上に掲載し又特に當時必要なりし神品職に關しての如き文は其全文を紙上に譯載したり。此事業は一千八百四十七年に聖彼得斯堡神科大學内に於て聖金口の著作の全部を翻譯するの議の起ると共に中止され其代りに大學内に設立せられたる一協會は直に其議決の實行に着手し聖

務會院の賛同を得て爾後二十個年の間雜誌の附録に聖金口の著作を添へ又一方には單行書として其翻譯を公にするに至れり。聖彼得斯堡神科大學の聖金口全集の翻譯事業は斯る情態を以て一千八百六十六年迄繼續されたるが其年同大學は該事業を一旦放棄せざるの止むなき事情に陥りぬ。其は一方に於て聖金口の著作の大部分が既に譯出されたると他は當時漸く露國を襲ひ來りし新知識は神學者の思想を他方に風靡せしめて正しき基督教の積極的開拓を捨て、基督教に反對する不信及び無神論を反駁し基督教の辯護者として起たざる可からざる時代の廻り來りたるが爲なり而して此防戰的時代を殆ど三十年の間繼續したるも三十年後の後に至りては社會は再び積極的の教義を要求する情態に復したれば聖彼得斯堡神科大學は茲に年來の希望を復活し遂に聖金口約翰全集を發刊するに至れり。露西亞語に

於て金口全集の發刊せられたるは實に以上述べたる如き歴史を有す、教會の大師父にして又世界の大神師なる聖金口の全集が露暉に際し如何なる原書を採用されたるかを述ぶるは極めて必要なることなり。聖金口の著作にして世に行はるゝもの數種ありと雖も該原書の價值は下に記載する簡單なる記事によりて明かに判決し得べし。最初に聖金口の著作の出版されたるは西歐に於て印刷機の發明後間もなきことにして其書は金口の著作の斷篇及び其一部を納めたるものにして語系は拉典なり希臘語原書に多少の修正を加へて出版せられたるは一千五百二十九年にして其書は維納なる Typis Stephani et fratris (ステファノ兄弟活版所) の印刷に掛り、マクシム、ドナトの序文を附して公にせられたる金口の聖使徒保羅の書札に對する講話なり。此書の出版以後暫くの後十六世紀の終十七世紀の初に當り聖金口の新約聖

書註釋ガイデリヘルグの出版者なるコムメリンによりて千五百九十年より千六百〇二年の間に 3000 (三つ折) 四卷の裝釘を以て公にせられたり。聖師父の著作に對する社會の嗜好は其以來年々發達し爾後十年を経たる一千六百十二年には實に金口の全集をさへ出版するに到れり。此全集は 3000 (三つ折) 八冊の大卷にしてエトナに於てヘンリイサビリイの熱心なる監督の下に印刷されたるものなり。全集の出版者サビリイは當時の學者間にありて數學と希臘語の深遠なる知識をもて推されたる英國の一學者にして一千五百四十九年に生れ、嘗ては女皇エリザベスに侍講したることあり、皇帝セームス一世は彼を教會と國家の名譽なる席に推薦したるも、彼は辭退して其を受けず、一千六百〇四年僅に騎士の爵位を受けたり、其頃彼は愛する一子を亡びたるが、其れより彼は殆ど全身を學術の爲に貢獻するに至り、オクスホード

に私費を以て幾何學と天文學の講座を開き、且其講師等をして、益々斯學の研鑽に怠なからしめん爲、幾何學の書籍を重に所藏する一圖書館を設立したり。當時の彼が唯一の娛樂は聖金口約翰の著作を讀み其を研究することにて、彼は此著作をして萬人に讀ましむべく、其全集の編纂を企てたり。此出版の爲には彼は多くの費用と勞力とを惜まず、各地に散在する此書の寫本を研究せんが爲に全歐洲の有名なる圖書館を訪問したり。サビリイは各地に駐割する英國公使の好意と、海外の學者の補助とにより、彼が雇ひたる筆耕者をして、巴里、バゼル、アウクスブルグ、ミュンヘン、維納及び其他の圖書館に遣はす便利を得たり。彼が出版したる金口全集の基礎となりたる原書はコンメリンの出版にして、彼は其に他の五寫本を参考し、彼此相異せる點を紙面の餘白に記載したり。此記載は必ずしも法を得たるものと稱し難しと雖、されば彼の出版

の價值は此傍註と其序文に在りて、後年カザウボン及び其他の學者により、他の出版の企てられたるも、全く此傍註と序文に基けるものなり。此大出版にサビリイが費したる費用は大凡八千フントステルリング(約八萬圓)の巨額に達したり。彼の妻が己の解し得ぬ書籍の出版に夫が斯くの如き巨額の金員を擲つを見て、其凡ての書籍を焼き棄てんとしたる程に不満なりしも、決して無理ならぬことなり。サビリイが出版せる聖金口全集は凡て希臘原書を編纂したるものなるが故に、其書を讀み得るものは學者若しくは希臘語に通ずる少數の人のみにして、當時にありても高等教育を受けしものと雖も、其多數は此書を解する能はざりき。されば多數の人に此書を讀ましめんには、自國語に譯出するべからず、且つ斯る翻譯は實に當時の社會の必然に要求せ

し所なりしが故にサピリイの出版の願はれたる後幾何もなく斯る翻譯世に顯れ來りたり此翻譯を企てし人は佛蘭西のフロントンドウツエイと稱する學者にして彼はサピリイと全く關係なく唯其贊助を得て聖金口全集の拉典語翻譯を企てたり即ち彼は先づ當時既に譯されて世に行はるゝ金口の著作を悉く驗したるも其中に一も満足すべきものなきを見自ら其翻譯をなすべく決したり彼の死は中途にして此貴重なる事業を中絶せしめたるも其後幾何もなく彼の二人の兄弟フレデリク及びクロドモレリは彼の志を嗣ぎて其事業に従事し一千六百三十三年に至り遂にクロドモレリは其全集の翻譯を完成したる。一千六百三十六年巴里に於て此翻譯は二つ折言(二〇)十二巻を以て始めて世に公にせられたり此翻譯の基礎となりし原書は矢張コムメリンの出版にして其に少しく改竄を加へたるものなるが其加筆とてま

ピリイが爲せる如く甚だしきものに非ず。聖金口約翰全集の出版せらるゝに就いては實に斯くの如き歴史と斯くの如き勞力を經て始めて成りたるものなるが其中下ツエイの出版は當時拉典語が普及せる丈に廣く讀者を有すると共にサピリイの出版に比して勿論拉典語とても萬人の知れる言語に非ざれば此書を解するものは無論多少教育を受けたるものに限られたれ共早く世に行はるゝに到れり然るに爾後十年を經て世は再び新たなる金口全集の出版を望むに至りたればベネヂクト派に屬する一學者にしてヘルナルド・モンフオンなる者再び該事業に一身を獻じ以前よりも尙一層完全なる金口全集の出版を企てたり此名譽ある有名なるベネヂクト派の著者は始め軍人なりしが彼は大に覺る所あり二十歳の時全く其勤務を捨て、ベネヂクト派の修道院の一員に加はり其處に己が使命の存

するを發見して遂に當代及び後世に有名なる文學者として永く其名を慕はるゝに到れり。此より先き一千六百九十八年、ベネチクト派の修士は其企てたる聖アプナシイ及び福アウグスチンの著作の出版を終りしかば、其に續いて聖金口の全集を出版せんとし、之が爲に三十年の日子を費すに定めたり。當時モンフコンは既に聖師父の著作に通曉せるを以て名ありしかば、此事業に推されて干與し、古き圖書館内に存在する種々の寫本を取調べん爲に三年間、彼は伊太利に派遣されたり。歸途、彼は修道院長に請ひて更に巴里の侯國圖書館及び其他の私立圖書館内を歴訪し、其伴へる修士と共に館内に存在する寫本を比較研究したり。斯くの如くにして殆ど三十年間に亙り、彼等が各圖書館に就きて發見したる聖金口の著作の寫本は實に三百種の多きに達したり。然りと雖も、モンフコンは尙ほ之に満足せず、聖金口全集の出版材料を蒐集

して寫本の訂正と其差異を比較するに資する所あらんと當時歐羅巴各國に名を知られし幾多の學者と交通し、其と親しき交際を結び、殆ど二十餘年間の絶えざる苦心と經營とを以て、甫めて其全集を公にした。該全集中には社會が嘗つて耳にせざる聖金口の幾多の著作を收め、且つ以前の出版に於て完からざりし金口の著作も、此全集中には完全に編纂されたり。モンフコンの苦心は斯く莫大なりと雖も、彼が出版せる全集の本文は意外にも不完全のものなりき。近世の英國學者フィールドは記して曰く、モンフコン版は其基礎とせし八個の主要なる寫本を十分調査せず、且つ該版はサピリイ版に據りたりと云ふ者ありと雖も、事實は全く是に反し、同版は金口全集の初版なるコンメリン版の再版に均しきモレイ(ドツエイ)版に多く倣ひたるものなりとされば、モンフコン版の他出版に秀でたる點は寧ろ其原文に非ずして、モンフコンが全

集に附したる序文及び彼が金口の講話の各節と各講話に就きて施せし著作の年代と内容と其性質等に關する詳細なる註釋なり。年代記上より之を見ればモンフオコンの出版は嚮に出版されたる諸版に比しては嘗つて企てざる點を記載したる爲に彼の「サビリー」ドツエイ等の出版に比し非常の進歩を成せるものにして其全集の最後の第十三巻目の如きは金口約翰の傳記と諸種の索引並に教會の教義と諸規則に對する諸件及金口時代に存在せし異端に對する判決を記載し其判決を金口の著作中より拔翠せる碎句を以て説明したり。されば若し吾人にしてモンフオコンが此出版を終りたる時既に八十有三の高齡に達したることを想ひ且つ彼が殆ど其生涯の五十有餘年間を此事業の爲に費したるを考へんには縦し彼の出版が不完全なる點ありとするも此出版の爾く有名なりし學者の才能と事業とを記憶する上に於て好箇の

遺物たるべきは誰しも否定せざる所ならん。彼は一千七百四十一年永眠したるが彼の出版は其死後幾度も複製せられ其最近刊に至りては一千八百三十九年巴里に於て印行されたるものさへあり。聖金口全集中には拉典希臘教會の諸聖列傳記の著者なる修道院長ミニの出版したるものあり。シヤクポリミニ (Migne) は前十九世紀の初なる千八百年に生れ巴里の近郊プチモンルヂ (Petite Montrouge) に神學書及び諸聖師父の著作を出版せし印刷所を設立したる人なり。彼が一千八百四十四年より世に公にし始めたる有名なる列傳 (Cursus Patrologiae completus seu bibliotheca universalis, integra, uniformis, commoda oeconomica scriptum, doctorum scriptorumque ecclesiasticorum... accurate J.P. Migne. Petite Montrouge) は實に裝釘華美なる三百七十九巻の大冊にして内部を拉典希臘の二部に分ち前者は二百十七巻に完結し後者は百六十二巻を以て終

れり。此ラランギリヤの二重の原文を以て出版されし列傳の後部なる希臘部四十七卷以後中には聖金口の著作も編入されたり。

ミニの出版せし聖金口全集新版は一千八百六十三年巴里に於て十三卷に出版されたるが其携帯に便なると少しく其本文を訂正したると例へば學者フリードが馬太福音の講話の批評的註釋書に於てなしたる批評の如き出版者たる修道院長ミニが此全集の出版に際して序文を附したると又近世の諸註釋者諸出版者の聖金口の著作に對して爲せし訂正註序文等の或物とを合せ出版したるとの外は同版は殆どベネチクト版の複製に異ならず。

然りと雖ミニ版は彼以前の學者が研究したる結果を悉く收めたるものにして且つ希臘と拉典の原文を頁を追うて印刷したる者なるが故に甚だ便利多く爲に世に行はるゝこと廣く苟も當時少しく教育ある

者にして此書を手にせず其内容及び其形を少しも知らざる者の如きは殆ど見出し難き程なり。此書は又實に聖金口全集の露語譯の基礎となり骨子となりたるものなり。

ミニ版の世に發賣せられざりし殘本は不幸にして一千八百六十八年其印刷所の火災の際凡て燒失したりしかば今日同版は容易に需め難く爲に其價は現今百八十馬克乃至二百馬克日本貨約百圓の間を上下し居れり。然れ共此價格たる若し吾人にして其全集中の豊富なる内容に思ひ至りなば決して格外の高價には非ず而して露語譯の聖金口全集に至りてはミニ版に比較して殆ど十分の一の廉價也。

聖金口の著作にして悉く其國語に翻譯されて一の全集として存在するもの今日獨り佛國に在るのみ、獨逸、英、吉利及び其他歐洲の各國にも聖金口の著作翻譯せられたる者尠からずと雖も其は孰れも拔萃に通

さす。されば露西亞譯の聖金口全集は此點よりして見れば全基督教界に於ける金口全集翻譯の第二位なり。

日本の基督教界に於ては尙ほ金口全集の翻譯を見ざると雖も其斷片に到りては正教會の翻譯書中今日迄翻譯せられし者尠からず。されば讀者の探讀に資せん爲四十五年初迄に出版せられたる者を擧れば左の如し。

△金口をしへ草

(全一冊大和田敬時譯定價金八錢郵稅金四錢)

(内容) ▲聖書を讀みて常に之を學ぶべし ▲聖書を讀みて得る所の利益 ▲聖書に書籍として聖書を所持は不充分なり ▲ハリストスは萬金の源泉なり ▲十字架の能力 ▲信者と稱へ得べき者 ▲神を望むの力 ▲愛 ▲仁慈 ▲眞正の富 ▲眞正と偽 ▲聖書は人と云ふ事を如何に解釋するか ▲有形世界に於て人はいかに尊き地位を占るか ▲神が人を人に降して之を試し給ふは果して何の爲ぞ ▲德行に就くの途 ▲行爲と懲報 ▲惡業者の状態 ▲神の業

主として萬事を行ふべし ▲吾人の主に勉むべきは専ら敬神の道を固守るにあり ▲處世の注意 ▲救贖上人爲と神爲 ▲不斷に祈るべし ▲人は何れの處にあるも常に祈禱を以て神に就くことを得べし ▲效のある祈禱 ▲吾人の祈禱の成就せられざることあるは何故ぞや ▲如何なる口實をかまふるも聖堂に參拜るを避くることを得べからず ▲靈魂の益を得んが爲に聖堂に詣でざるべからず ▲聖堂の教訓を聽きし後凡ての人々の負ふ可き相互の義務 ▲大祭日にのみ聖堂に詣づる信者に一言す ▲如何にして安全を謀るべきか ▲言ふべき時と黙るべき時 ▲口舌を節用すべし ▲沈湎をつゝしむべし ▲慎んで神の聖名を呼ぶべし ▲小罪を等閑にすべからず ▲富の日に預め貧の到るを想ふべし ▲司祭を責ぶべき事 ▲溫柔なるべし ▲敵の爲に祈るべし ▲不和を避くべし ▲惡言する勿れ ▲家裡に風波と憂愁のおこるは果して何によるか ▲地上の幸福より生る喜悅はかたからず善行によりて來る喜悅は易ず ▲罪を飾りて分疏する勿れ ▲失望す勿れ ▲日々省察 ▲誠實に己れの罪を懺悔すべし ▲痛悔の利益 ▲眞正の齋 ▲凡主を畏れて其途を行く者は福なり ▲今日爾は我と偕に樂園にあるべし ▲怖るべき。

裁判の日に於て利益を來すものは何ぞや▲聖なる「パスハ」天祭の祝教(以上十三篇)

△聖金口哥林多前書講話 (全三冊 吉田卯太郎講述)

△上編 定價^{背皮金四十二錢}郵稅十二錢 △中編 定價^{背皮金四十五錢}郵稅 八錢
△下編 定價^{背皮金八十錢}郵稅十二錢
總布金七十二錢

△聖金口約翰教訓 (上下二冊堀江復議定價^{上十八錢}下十四錢)(郵稅各四錢)

(上卷内容) ▲聖書を聴くの益▲神の名を常に呼ぶべし▲如何にせば長神の心を得べきか▲十字架の象と救の働▲如何なる心を以て神の殿に詣るべきか▲虚誇を以て祈禱すべからず▲我等は凡て聖書に於て教へらるゝ所を行ふに練習すべし▲我等は如何なる心情を以て聖機密をうくべきか▲聖使パウエルを讀する詞▲信者の本分▲我等は先づ第一に罪の赦を主に願ふべし▲如何なる罪人も己の救を得るに失望すべからず▲謙遜▲己を審くべし▲人の爲絶好なる飾は德行なり▲己の救を忽にし無知を以てこ

れを辨解すべからず▲如何なる職分と地位とに論なく救はるゝを得べし▲我等は神の諸賜を利用すべし▲耻づべき言語を以て口を汚すべからず▲故なく悪言せらるゝ時憂ふべからず▲譏言の爲に心を傷ましむべからず▲我等に加へらるゝ侮辱を我等心にうくべからず▲身體の美は靈魂の美にかゝる▲飽食▲沈湎▲禁食▲生涯の間の變遷に心を亂すべからず▲被牧者の教會牧者に對する關係▲主の誠命する祈禱の各言に於て衆人より願を發することを命じ給ふは何故なるか▲我等は近者の救を慮らざるべからず▲「ハリストス・テ・ア・ニ」の愛は何に在るや▲施は大なる功德なり▲貧者の不潔なる容貌に注目すべからず▲吝嗇なる者に告ぐ▲我等を愛する者に愛を以て答へざるは罪なり▲謙和の事▲近者を離するなかれ▲婦の選定に関する教訓▲母が女の爲に婿を選ぶに関する教訓▲死者の爲に哀憫するなかれ▲子の死の爲に悲むなかれ▲死者を涕泣して出来る丈彼等に助くべし▲末期の審判(以上四十三篇)

(下卷内容) ▲神の書を讀むを常に練習すべし▲神の書を讀むの益▲聖書を唯書籍として所持するは不充分なり▲ハリストスは萬善の泉なり▲十

字架の力▲誰が信者と名づけらるゝを得るか▲神を慕ひは如何なる力を有するか▲愛▲矜恤▲眞の富は何れにありや▲眞實の詐欺▲聖書に人といふ言は何を意味するか▲神は何故患難に試みらるゝを許すか▲此の生涯に於る徳行の途▲何故に一は此世に於て罰せらるゝも他の同く罪ある者は罰せられざるか▲凡て此世に於て爲す所の事の爲に報あらん▲魂生に於て邪悪なる人の情況▲すべて神の榮を顯すやうに行ふべし▲まづ敬虔を守ることを勉むべし▲身上に於て大なる慎戒を守るべし▲聞く所の言を一々心に容るゝなかれ▲救の行爲は我等に係るものと神に係るものとあり▲間斷なく祈禱すべし▲常に何處にも祈禱を以て神に趨就くべし▲いかなる祈禱は力を有するか▲我等が祈禱の必しも成らざるは何故か▲如何なる託言を以ても聖堂に行くを避くべからず▲靈魂の爲に益をうけんとの目的を以て聖堂に詣るべし▲聖堂にて教訓を聞きし後衆人互に關係し特に父の子に關係して如何なる本分あるか▲たゞ大祭の日に聖堂に行く所の者に告ぐ▲いかにせば靈魂を邪念より護るを得るか▲言ふべき時と黙すべき時▲舌を制すべし▲食に向て坐する時何を想起すべきか

▲沈溺を戒む▲神の名を敬て唱ふべし▲小罪を等閑にすべからず▲富む時に貧の來らんことを憶ふべし▲司祭を尊むべし▲溫柔▲悔を教すべし▲敵の爲に禱るべし▲不和を避くべし▲悪言▲汝等は人々の己に爲さんと欲する所の事を亦人々に爲せ▲一家の嫌惡と憂愁とは何より生ずるか▲此世の幸福より生ずる喜悅は堅からずされども善行より生ずる喜悅は易からず▲罪を爲して己を恕すべからず▲救に失望すべからず▲日々の自省▲赤心を以て罪を懺悔すべし▲悔改の益▲如何なるは眞の齋か▲凡そ主を畏れて其の途を行く者は福なり▲今日我と共に樂園にあり▲適當の備なくして聖機密を領るに就く者に告ぐ▲死者を過度に哀むなかれ▲恐るべき審判の日に益を興ふるものは何なるか來りて我に學べ、我は心柔和にして謙遜なる者なれば也▲聖「パスハ」に於るの脱教(以上六十篇)

△金口講話抄

(全一冊 吉田卯太郎譯定價廿錢郵税四錢)

(内容) ▲無益の穿鑿を休めて徳を積むべし▲眞の幸福を求めよ▲富者よ醒めよ▲恒に主の事に富め▲不幸を忍耐すべし▲徒らに死者のことを世に世に告ぐ▲夫婦各其徳を守れ▲公祈禱の時宜しく謹慎すべし▲爾等各自ら

矜恤金を嘗ふべし(以上前編)▲隣を妒む勿れ身む勿れ貧窮を恐る、勿れ▲
愛を追ひ求めよ▲大なるかな愛の徳▲愛は永く隨ちず▲我等は愛を以て
互に相教誨せん(以上後編)

△聖金口聖詠講話 (上中下三冊 木村英吉譯述定價七十二錢小包十二錢)

(上編) ▲自第三聖詠至第十二 ▲自第四十一至第四十九 ▲自第百八至第百九聖詠

(中卷) ▲既刊

(下編) ▲譯中

△神品論

(上製卅五錢郵稅六錢
普製廿六錢郵稅四錢)

△司祭に按手後の説教

△聖金口約翰説教集 (全二冊上田將壽述定價八十二錢郵稅十六錢)

明治四十五年一月二十日印刷
明治四十五年二月五日發行

金口の生涯と其事業集付

定價二十五錢

東京市牛込區水道町卅一番地

發行者兼 加島あきら

東京市神田區通新石町三番地

印刷者 田中市之助

東京市神田區通新石町三番地

印刷所 東陽堂

發賣所

東京市神田區駿河臺
東紅梅町六番地

正教會編輯局
(電話本局二五六九)

加島あきら著

雅歌の研究

四六版百三
十頁
定價郵税共
二十錢

▲藝苑曰、斯くの如く興味ある研究は大に歓迎すべき者にして清新の趣味を惹き我詩人間には少なからざる感化を與ふるならん真に文壇を益し且つ動するもの非ずして加島氏の近著の如き作なり云々

▲新公論曰、筆路勇健加ふるに華麗を以てす蓋此種出版中稀に見る所也
▲家庭雜誌曰、奮約中の雅歌を解釋したる者真摯なる著者を知る吾人は此書の必す有益の者なるを信ず
▲福音新報曰、宗教文學に屬する、機會なき我邦人には一種の興味を與ふるに足るものあらん、行文流麗にして自然を失はず

發行所 東京神田駿河臺東紅梅町六番地
正教本會編輯局

豊田精一譯

祈禱の時の身體の動作

頁數約六十頁 菊判半裁
願美本定價 郵税共八錢

正教會に於て祈禱の時に爲す伏拜、跪坐、舉手等の意味を主敎神學博士ウイサリオン師が解き明したるを補譯したるものなり讀者諸君の愛讀を乞ふ

加島あきら譯

祈禱に用ふる言の栞

菊判約七十頁
定價 五錢
郵税 二錢

本書の内容
(一)緒言(二)アリルイヤ(三)至聖三者に捧ぐる短讃詞(四)アミン(五)睿智護んで立て(六)主憐れめよ(七)衆人に平安(八)爾の神にも(九)永遠の記憶

發賣所 東京神田駿河臺東紅梅町六番地
正教本會事務所

編者著譯書

- ▲正教少年讀本 前驅授洗イオアン (四六判) 實價郵税共金七錢
- ▲聖セラヒム小傳 (四六判) 實價郵税共金拾參錢
- ▲結婚の神聖 (菊判半裁) 實價郵税共金拾貳錢
- ▲祈禱言の栞 (菊判半裁) 實價郵税共金五錢
- ▲ソロ「雅歌」の研究 (四六判) 實價郵税共金貳拾錢
- ▲通俗正教教話 全 (四六判) 實價郵税共金廿五錢
- ▲聖金口の生涯と其事業 (四六判) 定價郵税共金廿五錢

發賣所は東京神田駿河臺正教會事務所



